



ブック

片桐氏は、1987年から5年間に大学生調査を行ってきた。本書は、2012年調査結果(関西4大学文系学生652人)の分析を主な内容としている。

性別役割については、家事育児は女性のほうが向いている、

「公平に分担する」より「夫もできるだけ協力」、出産した

ら仕事をやめる、男らしい・女らしいと言われたら嬉しいなど、

保守的傾向が見られた。親子関係については、

親のようにになりたい、子どものままでいたいなど、「反抗期な

き若者」という傾向が見られた。社会関心については、戦争への

不安が減少し、電車やバスで席を譲る、地域行事に参加している

などが増えたが、社会運動への参加意欲は減った。政治意識については、福祉社会よりも、



不透明社会の中の若者たち

大学生調査25年から見る過去・現在・未来

片桐新自 著

2160円 関西大学出版部
☎06-6368-0238

競争社会、統制社会を理想の社会とする学生が増えた。生活意識としては、生活満足度が向上し、生活目標としては、この10年で「豊かな生活」が減り、「なごやかな毎日」「自由に楽しく」が増えた。職業面では、出世意欲が減退し、女子は「気楽な地位にいたい」、男子は「遊んで暮らしたい」が増えた。氏はこれを「不透明社会の中のゆとり世代の生き方選択」ととらえる。

明るい未来を期待できない若者たちが、未来よりは現状を楽しむみたいとするのは当然という見解もあるが、氏は「それでも、彼らはこの不透明な道を歩いていかなければならない」と指摘する。卒業後も不透明社会を生きていく生徒に対して、「学校で友達という今が楽しい」だけでなく、予測がつきにくい社会の中にあっても自己の位置決めをして卒業していけるよう支援する必要があると評者は考える。

(聖徳大学教授・西村美東士)